



努力と閃きの要因分解

「天賦の才とは1%の閃き^{ひらめ}と99%の努力である」とは、発明家にして事業家だったエジソン（Thomas Edison, 1847-1931年）が遺した言葉だ。今日では普通、「成果の殆どは努力で決まる」「才能の欠如は努力でいくらかでもカバーできる」くらいの意味に解釈されて、努力することの重要性を強調する文脈でよく引用される。投資運用の世界で行われる「パフォーマンス要因分解」風というと、さしずめ「成果を100%としたとき、閃きの寄与は1%、努力の寄与は99%」となる。そこでは「成果=閃き+努力」という関係が想定されており、閃きはわずか1%の取るに足らない存在というわけだ。

ところが、先の言葉が、ある有力文芸誌に掲載されて流布した後に、エジソン本人が述懐したところによると、「この発言は“少しも閃きがなければ、いくら努力しても無駄”という意味だった」というのである。つまり、彼は努力ではなく閃きの重要性を説いたようなのだ。敷衍すると、彼が行ったのは因子分解（成果=閃き×努力）であり、したがって閃きがなければあらゆる努力が無駄になるばかりか、相当の努力量に対して、わずかな閃きの違いが決定的な成果の違いとなって現れる。

努力の大切さを教え込まれた人は、彼の真意を知って裏切られたような気分になったかもしれな

い。ましてや、なかなか閃きが訪れないために目下の努力が無に帰すかもしれないと疑心暗鬼になると、努力の水準自体が低下してしまい、成果に結実しないという「予言の自己充足」にもなりうる。

なかなか閃きに恵まれない人に、何か救いはないものだろうか。最も簡単な方法は「閃き×努力」のように、閃きと努力に正の関係を想定することだ。この下では「成果×閃き×努力」となって、成果は努力量ないしその2乗に比例する。実際に閃きと努

力が比例するかは知らないが、便宜的にこう考えておくだけでも不安から解放され、そのうち素晴らしい閃きに恵まれるかもしれない。

そういえば、学生の時分に私がクラスで学んだある計量経済学者は、「量より質」という先言をもじって「質は量に比例する」と言いながら、毎週山のような課題と文献のリストを配っていた。今思えば、彼は努力をすれば、それだけ多くの閃きも得られることを言っていたのかもしれない。

結局、いつかは閃くと信じながらハードワークをこなすしかないという現実を認めることは、勤勉な読者にとって強力な精神安定剤になると思うのだが、いかがだろうか。

（浦壁 厚郎）

